

〈布薩〉の実践の目的と効能

——シュラーヴァカ・アーチャーラ文献を中心として——

堀 田 和 義

はじめに

仏教には布薩と呼ばれる儀礼があり、仏教が伝播した地域において今日にいたるまで実践されてきた。また、仏教の布薩に関する研究も、これまでに数多くなされてきた。仏教の布薩に相当するものはジャイナ教にも見られるが、それはこの儀礼がヴェーダ祭式前日の潔斎に由来するためである。仏教の布薩は、主として出家修行者の儀礼として発展していったが、ジャイナ教では本来の姿である在家信者の儀礼として今まで行われてきた。

ジャイナ教には在家信者の行動規範について詳しく記したシュラーヴァカ・アーチャーラ文献と呼ばれる文献群がある。そこで説かれるのは 5 小誓戒、3 徳戒、4 学習戒を合わせた 12 誓戒が中心となるが、布薩は学習戒に含まれ、半月 (pakṣa) の 8 日目と 14 日目などに行う断食を中心とする実践行として説かれている。本稿ではそれらの記述に基づいて、〈布薩〉の実践の目的と効能について検討する。⁽¹⁾

最初に、先行研究の所論を整理しておきたい。⁽²⁾ Williams 1963 では、〈布薩〉の実践の目的と効能に関して、大きく分けて次の 2 点が述べられている。(1) 〈布薩〉の第一の目的は、サーマーイカ行が適切に実践されるようにすることである。(以下、Williams (1)) (2) Āśādhara は Samantabhadra の決まり文句を用いて、「〈布薩〉を実践する人は衣を纏った聖者 (muni) のように見える」と述べている。(以下、Williams (2))⁽³⁾

本稿では、シュラーヴァカ・アーチャーラ文献における〈布薩〉の実践の目的と効能について検討しながら、併せてこの2点を検討する。シュラーヴァカ・アーチャーラ文献の中には、〈布薩〉について定義・説明するなかでその目的と効能を明言していない文献も多いが、本稿では、その目的と効能や果報を比較的はっきりと述べているものに基づいて見ていくことにする。

はじめに生天（天界に生まれること）を目的とすると述べる用例を見ていく（1. 生天のための〈布薩〉）。次に、サーマーイカ行との関連を述べる用例を検討する（2. サーマーイカ行と関連する記述）。ここでは、〈布薩〉とサーマーイカ行の関係に関する聖典時代の記述にも言及する。

そのうえで、解脱を目的とする〈布薩〉の用例を見ていく（3. 業の滅尽、解脱のための〈布薩〉）。ここでは、サーマーイカ行もまた、究極的には解脱を目的としていることにも触れる。そして最後に、出家修行者と同等の立場を獲得すると述べる用例を検討する（4. 出家修行者と同等の立場の獲得）。

1. 生天のための〈布薩〉

〈布薩〉の果報として、生天を提示する文献がある。このような用例は、Williams 1963 では触れられていない。また、管見の限り、唯一の用例でもある。そこでは、以下のように記されている。

8日目と14日目に断食を実践する良い心を備えた者たちは、天界における長寿を獲得する。⁽⁴⁾ (*Padmapurāṇa* 339)

ここでは白分（月が満ちていく半月）と黒分（月が欠けていく半月）の中日と最終日に相当する8日目と14日に断食を行うことで生天し、そこにおける長寿が獲得できると述べられている。他にも *Praśamaratiprakarana* のように、〈布薩〉だけの果報ではないが、誓戒全体の果報として同様のことを述べるものも見られる。PRPの描写はより具体的であり、サウダルマ・カルパにおいてインドラ等の優れた地位に達し、そこで安樂を享受すること、さらには、そ

の後、人間界に戻り、8つの生まれ以内に必ず成就に達することが記されている。⁽⁵⁾

2. サーマーイカ行と関連する記述

2.1. サーマーイカ行のための〈布薩〉

Williams 1963 が述べているように、〈布薩〉の目的をサーマーイカ行と関連付ける文献もいくつか見られる。サーマーイカ行とは、〈布薩〉の誓戒と同様、シュラーヴァカ・アーチャーラ文献において4つの学習戒に含まれ、断食の日などに（もしくは毎日）、静かな場所で一定時間にわたって瞑想などを実践するものである。

〈布薩〉をサーマーイカ行と関連付ける用例として、例えば、*Dharmaratnākara*, *Puruṣārthaśiddhyupāya* は次のように述べる。

毎日身につけたサーマーイカ行の潜在力を確固たるものにするため、2つの半月の中日（= 8日目と 14日目）に必ず断食を行うべきである。⁽⁶⁾ (DhR 16.4.1=PASU 151)

同じように〈布薩〉の目的をサーマーイカ行と関連付ける文献には *Dharmasamgrahaśrāvakācāra*, *Sāgāradharmāmṛta* などがある。

ここで〈布薩〉は「節目」を意味し、4種類の食物を放棄することである。その〈布薩〉と呼ばれる誓戒は、サーマーイカ行の成就のためである。⁽⁷⁾ (Śr(M) 4.60)

4つの節目に、聖典に従い、サーマーイカ行の潜在力を確固たるものにするために、絶えず4種類の食物を放棄することが〈布薩〉である。(SDhA 5.34)⁽⁸⁾

これらの記述からは、Williams 1963 でも述べられているように、〈布薩〉の実践とサーマーイカ行との間に、密接な関連が意識されていたことが確認できる。

2.2. 〈布薩〉とサーマーイカ行の関係

これまでに、〈布薩〉の目的を「サーマーイカ行の潜在力を確固たるものにするため」とする用例をいくつか見てきた。

シュラーヴァカ・アーチャーラ文献ではないが、それよりも成立が古いと考えられる白衣派聖典の中にも両者の関係に言及するものが見られる。そこでは、次のように記されている。

尊者（＝ガウタマ）は言った。ある在家信者たちがいた。彼ら（＝在家信者たち）はかつて次のように言った。「我々は剃髪して、在家から家なき者となることはできない。我々は14日目と8日目と新月の日と満月の日に完全な〈布薩〉を守ることもできない。我々は最期のサッレーカナー（断食死）を実践し、食物、飲み物を拒んで、死を望まずにいることもできない。我々はサーマーイカ行と場所に関する行とを〔実践しよう〕。東西南北の〔境界の外側において〕あらゆる生類、あらゆる生き物、あらゆる生命、あらゆる命に対する暴力を放棄し、生類、生き物、生命、命に対して安寧をもたらそう」。⁽⁹⁾ (*Sūyagada* 2.7.29)

この記述を見る限りでは、〈布薩〉、およびサッレーカナーを実践できない者がサーマーイカ行を実践することになる。つまり、〈布薩〉の誓戒がサーマーイカ行よりも難行と考えられているのである。

シュラーヴァカ・アーチャーラ文献においては、〈布薩〉とサーマーイカ行のどちらが難行であるかを示唆するような記述は見られない。しかし、〈布薩〉の実践がサーマーイカ行を補助するという見解に、白衣派聖典の記述（もしくは、そのもとになった考え方）が影響を与えた可能性は十分に考えられる

だろう。

3. 業の滅尽、解脱のための〈布薩〉

他にも、サーマーイカ行そのものには言及しないが、業の滅尽に言及する用例も見られる。例えば、*Dvādaśānuprekṣā* では、次のように述べられている。

〔汚濁を〕鎮め、世間的活動を離れ、たとえ1度でも断食をするならば、
その知者は多くの生存の間に積んだ業をたやすく滅ぼす。⁽¹⁰⁾ (KA 377)

ここでは、〈布薩〉の実践により、業を滅ぼすことができる事が述べられている。同様の用例としては、⁽¹¹⁾ *Sāvayadhammadohā*, ⁽¹²⁾ *Amitagatiśrāvakācāra*,
⁽¹³⁾ *Vratodyotanaśrāvakācāra*, ⁽¹⁴⁾ *Dharmopadeśapīyūṣavarṣaśrāvakācāra*, ⁽¹⁵⁾ *Subhāṣitaratnasamdoha* などがある。これと同趣旨のことを述べる文献としては、例えば、次のようなものがある。

幸福のため、解脱可能な者は3つのもの（=身体、言葉、心）を清め、ジナを信奉することにより、5日目などの節目に断食を行うべきである。
(Śripūjyapādaśrāvakācāra 82)

ここに見られる「幸福のため」という表現の「幸福」という言葉の意味するところが世俗的なものであるのか、超世俗的なものであるのかは明確でない。
しかし、この先の部分には、次のような記述が見られる。

それ（=断食）により、靈魂は以前に蓄積した業を滅ぼし、業を滅ぼせば成就に赴く。この点に疑いはない。(Śr(P) 85)
⁽¹⁶⁾
⁽¹⁷⁾

したがって、ここでの「幸福」という語は、成就（=解脱）を指すと考えられる。Śr(P) のこのような記述からは「〈布薩〉 → 業の消滅 → 成就」という

図式が読み取れる。⁽¹⁹⁾ そして、このような図式は、次の Śr(AD), Śr(U), Śr(PN) の記述とも重なっている。

心を不動にするものが、〈布薩〉である。それは、解脱の樂の原因であり、⁽²⁰⁾ 業の集積を滅ぼす。(Śr(AD)141)

世間的活動を離れ、専ら断食に依拠する者は、多くの業を滅ぼして、不滅⁽²¹⁾ の樂を享受する。(Śr(U) 432)

また、*Bhavyadharmpadeśopāsakādhyayana* では、業の滅尽へと至るプロセスがより詳しく述べられている。

あらゆる目的の成就をもたらす〈布薩〉を誓戒とともに実践すべきである。「〈布薩〉なくして成就是ない」ということは確定している。〈布薩〉は〔業の〕抑止状態のためあり、〔業の抑止〕状態によって業が消滅する。⁽²²⁾ 業が消滅すれば、解脱と良い果報をもたらす優れた認識が生じる。

(BhDhU 304-305)

この記述からは「〈布薩〉 → 業の抑止状態 → 業の消滅 → 優れた認識 → 解脱 (= 成就)」という構図を読み取ることができる。また、〈布薩〉が業の滅尽、遮断の原因であることを述べ、他にも「最高の医薬であり、生、死、老、病(=輪廻)を滅ぼすのに巧みである」ことを述べている *Lātīsamṇhitā* の記述もそれに近いと言えるだろう。

また、「毎日身につけたサーマーイカ行の潜在力を確固たるものにするため」と述べる DhR 等の例を先に挙げたが、そのような場合には、サーマーイカ行そのものの目的がどこにあるのかという問題が生じる。この点については、PASU のサーマーイカ行の説明の中に見られる、次のような記述が参考になる。

欲望と憎悪を放棄することにより、あらゆるものに対する平等に依拠して、
眞実の認識の根源たるサーマーイカ行を何度も実践すべきである。(PASU
148)

ここでは、サーマーイカ行の実践により眞実の認識が生じるとされる。「眞実」(tattva)という語が、ジャイナ教の7つ、もしくは9つの眞実を意味する
と考えるならば、長期的に見て、そこから解脱へ繋がっていくと考えられる。

また、生天のための〈布薩〉の用例として先に挙げた PRP の記述も、天界
に生まれた後に人間界に戻り、8つの生まれ以内に必ず成就に達すると述べて
おり、長期的に解脱に繋がるものとして描かれている。

4. 出家修行者と同等の立場の獲得

次に、Williams(2)を確認しておきたい。そこでは、Āśādhara が Samantabhadra の決まり文句を用いて、「〈布薩〉を実践する人は衣を纏った聖者のように見える」と述べていると記されていた。以下においては、Āśādhara と Samantabhadra の両者の原文を確認しておこう。

SDhA の記述は、次のようなものである。

〈布薩〉に依拠する者は、[4種の] 食物と身体の装飾、世間的活動を放棄し、近くにいる者たちにとっても、衣を纏った聖者のように見える。
(SDhA 7.5)

一方、Williams 1963 が SDhA のもとになったと考えている Samantabhadra の
言葉は、Ratnakaranyaśrāvakācāra の以下の箇所であろう。

サーマーイカ行の状態においては、世間的活動もいかなる執着もないでの、
その時には在家信者も、あたかも衣を纏った聖者のように修行者となる。
(RK 102)

ただし、RK のこの箇所は〈布薩〉に関する説明ではなく、サーマーイカ行に関する説明であるという点に注意が必要である。Williams 1963 では、この点が明示されていない。

その他に、Williams 1963 が言及していない同様の例としては、*Ratnamālā* の以下のような記述を挙げることができる。

他の行いに関しても、教典に述べられた方法に従って行うものと考えられている。このように行いを実践しているジャイナ教徒は、“gr̥hasthācārya”⁽²⁷⁾と呼ばれる。(RM 50)

ここに見られる “gr̥hasthācārya” という語の意味は明らかでないが、同格限定複合語に解して、「在家信者でありながら、アーチャーリヤのように敬われる者」、あるいは、格限定複合語で「在家信者たちのアーチャーリヤ」を意味するものと考えられる。そして、前者の場合には、出家修行者と同等の立場を獲得するものと見なすことができる。

また、先ほど言及した PASU は、〈布薩〉に関する規定の最後の部分で次のように述べている。

このようにあらゆる非難すべきことを完全に離れて、16 ヤーマ (=48 時間)⁽²⁸⁾ を過ごすならば、その時、その者には必ず完全な不殺生の誓戒がある。
(PASU 157)

ここでは、不完全な不殺生の誓戒、すなわち在家信者が守るべき小誓戒ではなく、完全な不殺生の誓戒、すなわち出家修行者が守るべき大誓戒を守ることになると述べられている。RK, RM, SDhA などに比べると間接的な表現にとどまっているが、在家信者が出家修行者と等しい立場になることが示唆されている。

5. むすび

ここまで述べてきたことをまとめて、本稿のむすびにかえたい。

Williams (1)では、〈布薩〉の目的をサーマーイカ行の適切な実践とするが、PP や PRP のように生天を挙げる用例も見られる。Williams 1963 で述べられているように、〈布薩〉の目的を、同じ学習戒の 1 つであるサーマーイカ行と関連付ける文献もいくつか見られる。先行研究で述べられていない点としては、白衣派聖典 *Stīyagada* には、〈布薩〉の誓戒がサーマーイカ行よりも難行であるとする記述が見られる点を挙げた。シュラーヴァカ・アーチャーラ文献にはそのような記述は見られないが、これらの記述の影響を受けた可能性は十分に考えられる。

また、〈布薩〉によって業を滅ぼすことができるとする用例も多く認められる。さらには、「幸福のため」、より具体的に「成就（＝解脱）」「解脱の樂」「不滅の樂」という表現を用いるものもある。BhDhU などの記述からは、業の滅尽もまた、最終的には解脱へと繋がるものと解することができる。そのような意味では、サーマーイカ行も究極的な目的を同じくするものと考えられる。

Williams (2)では、Āśādhara が Samantabhadra の決まり文句を用いて「〈布薩〉を実践する人は衣を纏った聖者のように見える」と述べているとされるが、RK のこの部分は〈布薩〉ではなく、サーマーイカ行について述べたものであるという点に注意が必要である。その他に、Williams 1963 が言及していない例として、〈布薩〉を実践した者が“grhasthācārya”と呼ばれるとする用例や、その者に完全な不殺生の誓戒があると述べる用例も見られる。

最後に、出家修行者だけでなく、在家信者も解脱を獲得することが可能なのかどうか、という問題に簡単に触れておきたい。というのも、在家信者でも解脱を獲得できるならば、出家と在家という区別そのものが重要でなくなってしまうからである。

本稿で見てきた用例からは、短期的なものだけでなく、長期的なものも含め

て、在家信者に解脱という果報が説かれていることがわかる。このような用例については、筆がすべてた、もしくは、在家信者へのリップサービスと解釈することも可能であるが、筆者はそうでないと考える。

たとえば、ジャイナ教では理想の死に方として断食死が推奨されてきたが、その実践中に、在家信者にも出家修行者と同じ大誓戒を受け入れることを規定する文献が見られる。また、ジャイナ教の在家信者には、12誓戒の体系とは別に、各人の靈的なレヴェルを段階別に記した11階梯というものが見られる。⁽²⁹⁾それらを見る限り、ジャイナ教における僧俗の区別は、我々がイメージするほど明確なものではない。両者の間にあるのは明確な境界線ではなく、グラデーションである。したがって、在家信者に出家修行者と同じ果報が説かれていたとしても、そのこと自体は、それほど驚くに値しないと考えられる。

【略号表】

- KA Kārttikeya: *Dvādaśāmuprekṣā* (Śrīmad Rājacandra Jaina Śāstramālā), Āgās, 1960.
- T(U) Umāsvāti: *Tattvārthaśūtra* (Bibliotheca Indica), Calcutta, 1903.
- Doha Sāvayadhammadohā → ŠĀS 1
- DhR Jayasena: *Dharmaratnākara* (Jīvarāja Jaina Granthamālā no.24), Solāpūr, 1974.
- PASU Amṛtacandra: *Puruṣārthaśiddhyupāya* (Śrīmad Rājacandra Jaina Śāstramālā no.7), Āgās, 1977.
- PP Ravīṣeṇa: *Padmapurāṇa* (Bhāratīya Jñānapīṭha Mürtidevī Jaina Granthamālā: Saṃskṛta Grantha no. 21), New Delhi, 2003.
- PRP Umāsvāti: *Praśamaratiprakarana* → T(U)
- BhDhU Jinadeva: *Bhavyadharmaṇopadeśopāsakādhyayana* → ŠĀS 3
- RK Samantabhadra: *Ratnakaraṇḍaśrāvakācāra* (Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā no. 24), Bombay, vi°sam°1982.
- RM Śivakotī: *Ratnamālā* → ŠĀS 3
- LS Rājamalla: *Lāṭīṣamhitā* (Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā no. 26), Bombay, vi°sam°1984.
- ŠĀS 1 Śrāvakācārasamgraha vol. 1 (Jīvarāja Jaina Granthamālā: Hindī Vibhāga no. 27) Solāpūr, 1976.
- ŠĀS 2 Śrāvakācārasamgraha vol. 2 (Jīvarāja Jaina Granthamālā: Hindī Vibhāga no. 28) Solāpūr, 1976.

ŚĀS 3 *Śrāvakācārasaṃgraha* vol. 3 (Jīvarāja Jaina Granthamālā: Hindī Vibhāga no. 29) Solāpūr, 2003.

Śr(A) Amitagati: *Amitagatiśrāvakācāra* → ŚĀS 1

Śr(AD) Abhradeva: *Vratodyotanaśrāvakācāra* → ŚĀS 3

Śr(U) Umāsvāmin: *Umāsvāmiśrāvakācāra* → ŚĀS 3

Śr(G) Guṇabhūṣāṇa: *Guṇabhūṣāṇaśrāvakācāra* → ŚĀS 2

Śr(PN) Padmanandin: *Śrāvakācārasāroddhāra* → ŚĀS 3

Śr(PP) Pūjyapāda: *Śrīpūjyapādaśrāvakācāra* → ŚĀS 3

Śr(B) Brahmanemidatta: *Dharmopadeśapīṭyūṣavarsaśrāvakācāra* → ŚĀS 2

Śr(M) Medhāvin: *Dharmaśaṅgrahaśrāvakācāra* → ŚĀS 2

SDhA Āśādhara: *Sāgāradharmāmṛta* (Bhāratīya Jñānapīṭha Mürtidevī Jaina Granthamālā: Saṃskṛta Grantha no. 47), Vārāṇasī, 2000.

SRS Amitagati: *Subhāṣitaratnaśaṃdoha* (Jīvarāja Jaina Granthamālā: Hindī Vibhāga no.31) Solāpūr, 1977.

ここに挙げた文献の多くは、これまでと同様、都城工業高等専門学校の藤永伸先生、筑紫女学園大学の宇野智行先生のご厚意で参照させていただいたものである。ここに記してお二人に感謝申し上げたい。

【参考文献】

Bhargava, Dayanand

1968 *Jaina Ethics*. Delhi. Motilal Banarsiādass.

Folkert, Kendall W.

1993 *Scripture and Community: Collected Essays on the Jains*. Atlanta. Scholars Press.

Sogani, Kamal Chand.

1967 *Ethical Doctrines in Jainism*. Solāpūr. Jaina Saṃskṛti Saṃprakṣaka Sangha.

Stevenson, Sinclair.

1915 *The Heart of Jainism*. London. Oxford University Press.

Williams, R

1963 *Jaina Yoga: A Survey of the Mediaeval Śrāvakācāras*. London. Oxford University Press.

註

- (1) 以下、ジャイナ教の布薩に関しては、仏教の布薩と区別するために、〈 〉を付した〈布薩〉という表記を用いる。

- (2) ジャイナ教の〈布薩〉に関する主な先行研究としては、Williams 1963, Sogani 1967, Bhargava 1968 を挙げることができるが、扱っている文献の数その他の点でも、Williams 1963 が最も優れており、他の 2 つはそれを超えるものではない。本稿では、先行研究としては Williams 1963 を主として扱う。その他のものに関しては、Sogani 1967, p. 103 以下, Bhargava 1968, p. 135 以下を参照。
- (3) In general it is held that the primary aim of the *poṣadhopavāsa* is to enable the *sāmāyika* to be properly performed: wherever it is entire there of necessity the *sāmāyika* exists, where it is partial the *sāmāyika* may or may not be attained. Āśādhara takes up from Samantabhadra the cliché that a man performing the *poṣadha* appears to onlookers as a muni on whom clothes have been draped. Williams 1963, p. 144.
- (4) upavāsaṃ caturdaśyām aṣṭamyaṃ ca sumānasāḥ/ sevante te nibadhnanti ciram āyus triviṣṭape//PP 339
- (5) prāptah kalpeṣv indratvaṇ vā sāmānikatvam anyad vā/ sthānam udāraṇi tatrānubhūya ca sukhaṇi tadanurūpam// naralokam etya sarvaguṇasampadaṇ durlabhāṇ punar labdhvā/ śuddhaḥ sa siddhim esyati bhavāṣṭakābhyanṭare niyamāt//PRP 307–308; また、Doha にも同趣旨の記述が見られる。aṇuvayaguṇasikkhāvayaīm tāīm ji bāraha humṭi/ bhumjāi vi narasurasuhaiṃ jiu ṣivvānahu ḥiṇṭi//Doha 59
- (6) sāmāyikasamāskārām pratidinam āropitaṇ sthīrīkartum/ pakṣārdhayor dvayor api kartavyo 'vaśyam upavāsaḥ//DhR 16.4.1 (=PASU 151) ただし、DhR は冒頭で、苦行が「大きな輪廻の苦惱を防ぐ樂の唯一の原因である」ことや、「それを実践している者が、神のごとく崇拝される」点にも言及している。parāvaraṇvaraṇasukhaikakāraṇam tapo mahābhavabhabatāpavāraṇam/ prapañcyate param adhunā hy agāriṇāṇ prasaṅgataḥ kim api mahānagāriṇām// yad ācaran deva iva prapūjyate parair api svair api yan tatra nā/ parair guṇair dūram apākṛto 'pi sann adas tapas tapyam apāstataṇdribhiḥ//DhR 16.1–2
- (7) proṣadhaḥ parvavacīḥa caturdhāhāravarjanam/ tatproṣadhopavāsākhyāṇ vrataṇ sāmyasya siddhaye//Śr(M) 4.60. ここで述べられている 4 種類の食物は初期仏典などにも見られるもので、食べるものの (aśana), 飲むもの (pāna), 噛むもの (khādyā), 染めるもの (lehya) の 4 つを指す。
- (8) sa proṣadhopavāso yač catuṣparvyām yathāgamam/ sāmyasamāskāradārḍhyāya caturbhuktyujjhanaṇ sadā//SDhA 5.34
- (9) bhagavaṇ ca ḥaṇ udāhu — samṛtegaiyā samaṇovāsagā bhavaṇti/ tesīm ca ḥaṇ evaṇ vuttaguvvam bhavai — ḥo khalu vayaṇ samcāemo muṇḍā bhavittā agārāo aṇagāriyam pavvaittae/ ḥo khalu vayaṇ samcāemo cāuddasatthamudditthapuṇṇamāsiṇīṣu padipuṇṇam posahaṇ aṇupālittaē/ ḥo khalu vayaṇ samcāemo apacchimamāraṇamāṇtiyasamṛlehaṇājhūṣaṇājhūsiyā bhattapāṇapādiyāikkhiyā kālaṇ aṇavakaṇkhamāṇā viharitae/ vayaṇ ḥaṇ sāmāiyam desāvagassiyam — purathā pāṇīm paṭīṇam dāhiṇam udīṇam etāvattāva savvapāṇehiṇ savvabhbuehiṇ savvajīvehiṇ savvasattehiṇ daṇḍe ḥiṇkkhitte, pāṇabhbūyajīvasattehiṇ khemāṇkare ahamāṇsi/ Sūryagaṇa 2.7.29. (Āṅgasuttāni vol. 1, Ed. Ācārya Tulstī, Jain Viśva Bhāratī Saṇṭhāna, Lāḍnūn, 1992)

- (10) ekkam pi nīrāraṁbho uvavāsam jo karedi uvasamto/ bahubhavasamciyakammaṁ so ḥāṇī khavadi līlāe//KA 377
- (11) cirakayakammahaṁ khau karai pavvadiṇihāṁ uvavāsu/ ahavā sosai sarasalilu bhaṇti na gimbhi diñesu//Doha 69; Doha 13 でも、同趣旨のことが述べられている。ubhayacauddasi aṭṭhamihāṁ jo pālai uvavāsu/ so cautthu sāvau bhaṇiu dukkiyakammavīñāsu//Doha 13
- (12) anekajanmasaṁbaddhakarmakānanapāvakah/ upavāsaḥ sa kartavyo nīrāgibhūtacetasā// Śr(A) 118; vartamāno matas tredhā sa varyo madhyamo 'dhamah/ kartavyaḥ karmanāśaya nijaśaktyanugūhakaiḥ//Śr(A)122; また、“karman”という語は用いないが、Śr(A)12.117, 132, 134, Śr(AD)108 も同様のことを述べている。
- (13) upoṣadhadhīhiḥ kṛto niyamapūrvvakair bhāvakair jinendrabhuvī śoḍāśapraharabaddha-sīmodyamaiḥ/ asaṅkhyabudhakāminīvihitamaṅgalāyāṁ kṣapāṁ iva vikartano harati karmabandhaṁ yakah//Śr(AD)107
- (14) tathā śikṣāvratānīuccair jaguś catvāri sādhavaḥ/ sāmāyikaṁ sadā parvopavāso nirjarākaraḥ//Śr(B)4.119; aştamāyāṁ ca caturdaśyāṁ proṣadhaḥ kriyate sadā/ karmaṇām nirjarāhetuh śrāvakācāracāñcubhiḥ//Śr(B)4.133; evaṁ suyuktito bhavyaḥ proṣadhaṁ yaḥ karoty alam/ karmaṇām nirjarā tasya sambhaven munibhir matam//Śr(B)4.140
- (15) abhuktyanupavāsaikabhuktayo bhaktitatparaiḥ/ kriyante karmanāśaya māse parvacatuṣṭaye// karmendhanam yad ajñānāt sañcītaṁ janmakānane/ upavāsaśikhī sarvanām tad bhasmīkurate kṣaṇat//SRS 31.49–50
- (16) upavāso vidhātavyaḥ pañcamyādiṣu parvasu/ śreyortham prāṇibhir bhavyais triśuddhyā jinabhaktitalaḥ//Śr(P)82; 「節目 (parvan)」という語は、一般に 8 日目と 14 日目を指し、Śr(P) のように 5 日目を節目とする文献は少ない。
- (17) SDhA には、能力に従って実践した苦行が幸福をもたらすと記されている。upavāsākṣaiḥ kāryo 'nupavāsas tadakṣamaiḥ/ ācāmlanirvikṭyādi śaktyā hi śreyase tapaḥ// SDhA 5.35; また、“śreyas”ではなく、“sukha”という語を用いる例として、次のようなものがある。sa proṣadhopavāsas tu samutkṛṣṭaḥ sukhapradāḥ/ taddine pañcapāpānām santyāgo 'pi vidhīyate//Śr(B)4.136
- (18) tena naśyanti karmāṇī sañcītāni purātmanā/ naṣṭakarmā tataḥ siddhiḥ prayāty atra na saṁśayah//Śr(P) 85; また、業の減尽には言及しないものの、果報としての解脱に触れるものとして、次のようなものがある。śoḍāśapraharān evam gamayaty āgamekṣaṇaḥ/ yaḥ sa hārāyate bhavyaś cārumuktivadhūrasi//Śr(PN)3.315. Śr(U)430 にもこれとまったく同じ詩節が見られる。
- (19) 注 16 で述べたように、Śr(P) における〈布薩〉の実践日はやや特殊であり、一般的な 8 日目、14 日目だけでなく、5 日目が加えられている。そして「8 日目は 8 種の業を減ぼし、14 日目は成就をもたらし、5 日目は認識の獲得をもたらす」と述べられているが、これもまた他の文献には見られないものである。おそらく、8 という数字から 8 種の業を、5 という数字から 5 種の認識を連想するといった類のものであろう。14 という数字から成就 (siddhi) が導かれる理由は不明であるが、ジャイナ教で 14 という数字から連想しうるものとしては、14 の徳位 (guṇasthāna)

- を挙げることができる。aṣṭamī cāṣṭakarmaghñī siddhilābhā caturdaśī/ pañcamī jñānalābhāya tasmāt tritayam ācaret//Śr(PP)84
- (20) sa proṣadhopavāsaḥ syād yo dhatte niścalam manah/ sa karmanicayaḥ hanti yo mokṣasukhakāraṇam//Śr(AD)141
- (21) yo nirārambham apy ekam upavāsam athāśrayet/ bahukarmakṣayam kṛtvā so 'ksayam sukham aśnute//Śr(U)432. Śr(PN) も pāda b の一部を除いてほぼ同じものである。yo nirārambham apy ekam upavāsam upāśrayet/ bahukarmakṣayam kṛtvā so 'ksayasukham aśnute//Śr(PN)3.317; また、Śr(G) でも〈布薩〉が業を根こそぎにすることを述べた後、作法に従って〈布薩〉などを実践する者が、5つの吉祥を備えた者たちの最高の境地に達することを述べている。uttamo madhyamaś caiva jaghanyaś ceti sa tridhā/ yathāśaktir vidhātavyo karmanirmūlanakṣamah//.....〈中略〉..... proṣadhdhādyupavāsaḥ yaḥ kurvīta vidhinā punaḥ/ sa bhavet paramasthānaḥ pañcakalyāṇasampadām//Śr(G)3.62-69
- (22) proṣadhaṁ vratasamyuktaḥ kāryam sarvārthaśiddhidam/ proṣadhaṇa vinā siddhir na bhavaṭīti niścitam// proṣadhaṁ śamabhāvṛtham bhāvāt karmavināśanam/ karmanāśe ca sujñānaḥ mokṣadaṇaḥ suphalapradam//BhDhU 304-305
- (23) syāt proṣadhopavāsākhyāḥ vratam ca paramauṣadham/ janmamṛtyujarātaṅkavidhvam̄san avicakṣaṇam/LS 5.195; syāt proṣadhopavāsākhyā caturthī pratimā śubhā/ kartavya nirjarāhetuḥ saṃvarasyāpi kāraṇam//LS 6.11
- (24) rāgadveṣatāgān nikhiladravyeṣu sāmyam avalambya/ tattvopalabdhimūlam bahuśaḥ sāmāyiκam kāryam//PASU 148
- (25) tyaktāhārāṅgasamkāravyāpāraḥ proṣadhaḥ śritah/ celopasṛṣṭamunivad bhāti nedīyasām api//SDhA 7.5
- (26) sāmāyike sārambhāḥ parigrahā naiva santi sarve 'pi/ celopasṛṣṭamunir iva gr̄hī tadā yāti yatiḥāvam//RK 102
- (27) kriyāśv anyāśu sāstroktamārgenā karaṇam matā/ kurvann evam kriyāṇ jaino gr̄hasthācārya ucyate//RM 50
- (28) iti yaḥ ṣoḍaśayāmān gamayati parimuktasakalasāvadyaḥ/ tasya tadānīḥ niyatam pūrṇam ahīrṇsāvrataḥ bhavati//PASU 157
- (29) Folkert 1993, p. 170 では、この 11 階梯とヒンドゥー教の四住期との類似性が指摘されている。また、Stevenson 1915, p. 222 でも、11 階梯が 12 誓戒以上に僧俗の生活の橋渡しをするものであることが指摘されている。